

4) 神戸地域

日 時：平成16年6月12日(土) 10:00~13:00

会 場：県立神戸学習プラザ/第4講義室

テ ー マ：「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、
将来に生かしていくべきことは？」

10:00	はじめに	
(5分)	・あいさつ、趣旨説明	
10:05	ステップ0：「ワークショップとは？」	
(20分)	・ワークショップの進め方 ・アイスブレイク(自己紹介)	できるだけ簡単に
10:25	ステップ1：「10年間を振り返って」	
(40分)	被災地が	・震災後10年間でできたこと、できなかったこと
11:05	班別発表	
(10分)	・各班2分程度	
11:15	~休憩~	
11:25	ステップ2：「将来に向けて」	
(40分)	被災地が	・将来に向けて生かすべきこと ・世界に向けて発信していくべきこと
		ステップ1の整理 (40分)
12:05	班別発表	
(10分)	・各班2分程度	
12:15	~休憩~	
12:20	ステップ3：「まとめ」	
(35分)	・各班の成果を整理	ステップ1、2の両方について ・重要だと思う別々の島にシールを貼る
12:55	最後に	
(5分)	・総括ワークショップの案内と代表者の決定	
13:00	終了	・各班2人ずつ

・神戸地域ワークショップの様子



齋藤副知事のあいさつで始まる



アイスブレイクで会場の雰囲気も和やかに



各班とも熱心に意見を出し合う



どの班も負けじと熱のこもった発表が続く



各班の代表者によるステップ1のまとめ



ステップ2でも引き続き熱心な話し合いが続く



参加者全員でのステップ2のまとめ



丸シールによる投票の様子

・ステップ1：各班のまとめ

10年間を振り返って(2004年6月12日 神戸1)

外観・建物などの復興が出来た(16)

住所も比較的早くできた(16)
 車が出ました(16)
 赤い交通の復興ができた(16)
 八幡神社の鳥居がたつた(16)
 赤い交通の復興ができた(16)
 赤い交通の復興ができた(16)
 赤い交通の復興ができた(16)

赤い交通の復興ができた(16)

個人でボランティアに参加できるようになった(16)

高齢者のふりかへし車中の余のリーダーとして9年間参加できた(16)
 赤い交通の1・17のついでに赤い交通(9年間)参加した(16)
 赤い交通の1・17のついでに赤い交通(9年間)参加した(16)
 赤い交通の1・17のついでに赤い交通(9年間)参加した(16)

ボランティアに対する意識があがり団体ができた(16)

ボランティアで歌(楽しい)に参加している(16)
 ボランティアに参加できている(16)
 赤い交通の1・17のついでに赤い交通(9年間)参加した(16)
 赤い交通の1・17のついでに赤い交通(9年間)参加した(16)

具体的に備えをするようになった(食料・防災)(16)

備蓄品の確認ができた(16)
 防災の確認ができた(16)
 備蓄品の確認ができた(16)
 防災の確認ができた(16)

商店街がなくなったり住宅が復興されていなく空き地が残っている(16)

住宅が復興されていなく(16)
 商店街がなくなった(16)

災害に対する心構えができた(16)

災害時の避難所、赤い交通の場所の確認が出来た(16)
 子供たちの災害に対する意識があがった(16)

心の復興ができた(16)

他地域のみなさんの助けを借りて(16)
 人の心の大切さが身にしみる(16)

地域のコミュニティができた(16)

全面的復興を待ってもまだ人の心の復興はできない(16)

年齢的なつながりが弱くなった(16)

次世代の活動が少なくなった(16)
 地域の高齢化の防止ができていない(16)

コミュニティがすすんだ(16)

地域コミュニティに全力を注ぎたいと思う(16)
 地域活動が(いくらか)できた(16)
 地域活動：住宅・赤い交通のことが少しわかった(16)
 復興の大切さを認識できた(16)
 なんとかなりました(16)

10年間を振り返って(2004年6月12日 神戸2)

復興への都市計画はプラン通りに進んでいない。(20)

復興への都市計画はプラン通りに進んでいない(20)
 復興への都市計画はプラン通りに進んでいない(20)

災害弱者へのケアができていない(20)

災害弱者へのケアができていない(20)
 災害弱者へのケアができていない(20)

次世代の子らに災害の悲惨さが教えられていない。(20)

次世代の子らに災害の悲惨さが教えられていない(20)
 次世代の子らに災害の悲惨さが教えられていない(20)

被災後の行政の地域活動がうまくいっていない。(20)

被災後の行政の地域活動がうまくいっていない(20)
 被災後の行政の地域活動がうまくいっていない(20)

次の地震災害が起こった時に危機管理やサバイバルマインドがいかにかつ切かを知った。(20)

危機管理の大切さを知った(20)
 次の地震災害へどうするか(20)
 危機管理の大切さを知った(20)
 次の地震災害へどうするか(20)

地域の人達と心の支援を回り初の大切さを知ることができた。(20)

地域の人達と心の支援を回り初の大切さを知ることができた(20)
 地域の人達と心の支援を回り初の大切さを知ることができた(20)

復興住宅支援事業が円滑にできた(20)

復興住宅支援事業が円滑にできた(20)
 復興住宅支援事業が円滑にできた(20)

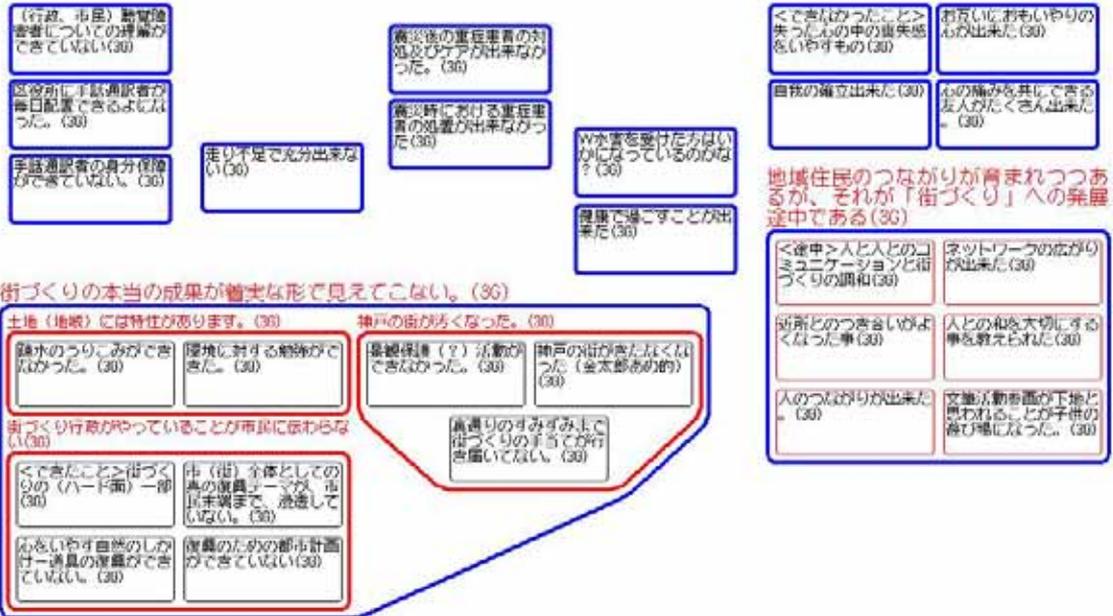
10年前は若かった(20)

10年前は若かった(20)
 10年前は若かった(20)

町がきれいになった(20)

町がきれいになった(20)
 町がきれいになった(20)

10年を振り返って(2004年6月12日 神戸3)



10年を振り返って(2004年6月12日 神戸4)



10年を振り返って(2004年6月12日 神戸5)

住民自治的なリーダーが育成には体系的な取り組みが必要。できていない(56)

リーダーのまとめる自治会等の発展(56)	リーダー個人の向上(56)
後援者の数費をにらんだ住民自治活動。リーダーの責務(56)	行政・公営等の連携(56)
用具・道具を使い切る力(56)	

防災の一般の準備ができていない(56)

ガス等停止時の対応策ができていなかった(56)	市民服係というより「住居」防災の表現が必要(56)
地区別の防災対策などができていない(56)	男性の社会参加の状況には進展がない(56)
被災一般の準備をしていないことを感じた。(56)	

心の復興がまだまだ残っている(56)

めんどくさいもの(とじこもり)と出ていないものがある(56)	心の復興がのこされたまま。できていない(56)	心の復興はまだまだこれから(56)
道具をける定量的評価結果が決まっていない(56)	公の施設の管理費の人は道は相変わらず困る(56)	

10年を振り返って(2004年6月12日 神戸6)

建物は出来たが空地は残っている(66)

コミュニティ施設も多く出来た。(66)	ハード面ではほぼ復興は完了した。(66)
空地がまだまだたくさんある(66)	

新しいいれあいのしくみが生まれた(66)

飲食住宅併住宅のコミュニケーションがとれていた(66)	新しいいれあいのネットワークの活動として地域の人の数の交流を進めている(66)	私はふれあい喫茶、バーガー、イキイキ講座等を皆さんと自分のために働いている(66)
私は現在その住宅で人生を終るまで住みたいので皆さんが楽しい仲間であってほしい(66)	私は色んな人の気持ちを知ることができた(66)	震災で起こった事実を事実として向き合おうことがやっと出来るようになった。(66)
地域の福祉センターでひとり暮らしの給食サービスをすすめて頂き、たのしいです(66)	阪急住宅時、住居に入ってからはずっとできていない(66)	

防災への意識を保持続けることの大切さとむつかしさを感じた(66)

私は単純ロック(固めあったと書)の用意ができていなかった(66)	私は水の節約ができていなかった(66)
私は職員が当時の「いさづ」にそなえる気持ちを持って続けられていない。(66)	防災に対する意識の向上があまりできていない(66)

住民組織の育成不足。リーダーの育成が必要(56)

できていなかった事。住民自治組織のレベルアップ(56)	住民防災に当たるリーダーの育成に手がついていない(56)
住民、自主防災のリーダーが不足している。(公務員や公務員以外の力量不足)(56)	復興住宅での高齢化とリーダーの育成ができていない(56)

新しいネットワークが広がっている(56)

福野軒に福祉部ができた(56)	慈善等会社に応じて元気は高齢者が多いグループができた(56)
新しい復興文化が育ちつつある(56)	地域おこし、おもちゃライブラリーを起こした(56)
町に花輪が増えた(56)	

メモリアルができた(56)

インフラの整備が早くできた(56)	阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」ができた(56)
-------------------	--------------------------------

経済的負担が増えた。家の復興(56)

金持ちと貧乏の格差が広がった(56)	自営の削減ができていなかった(56)
自分の家の建て直しができなかった(56)	借金ができた(56)
貯金ができなかった(56)	半壊の家の応急措置ができた(屋根のふきかえ)(56)
物(家など)はほぼできた(56)	

ボランティア活動が活性化した(56)

ボランティアグループとの出会いが生まれた(56)	ボランティアがあれいアロンの北こしに参加した(56)	ボランティアを楽しくすることができた(56)
ボランティアが活動を委譲し受け入れる事案ができた(56)	地域ではこしたフェニックス兵隊に参加した(56)	任意単全体を知りたいのだからと兵隊動員を卒業できた(56)
友達ができた。ネットワークが広がった(56)	地域おこし大島花屋も立ち上げた(56)	楽しいグループができた。(56)

新しい地域コミュニティがまだ出来ていない(66)

多くの団体の人たちが出会うコミュニティが出来た(66)	地域が、一帯感を保つことができていないのでは。(66)	復興の多い地域コミュニティづくりが出来るようになった(66)
地域コミュニティはやり変らず(66)		

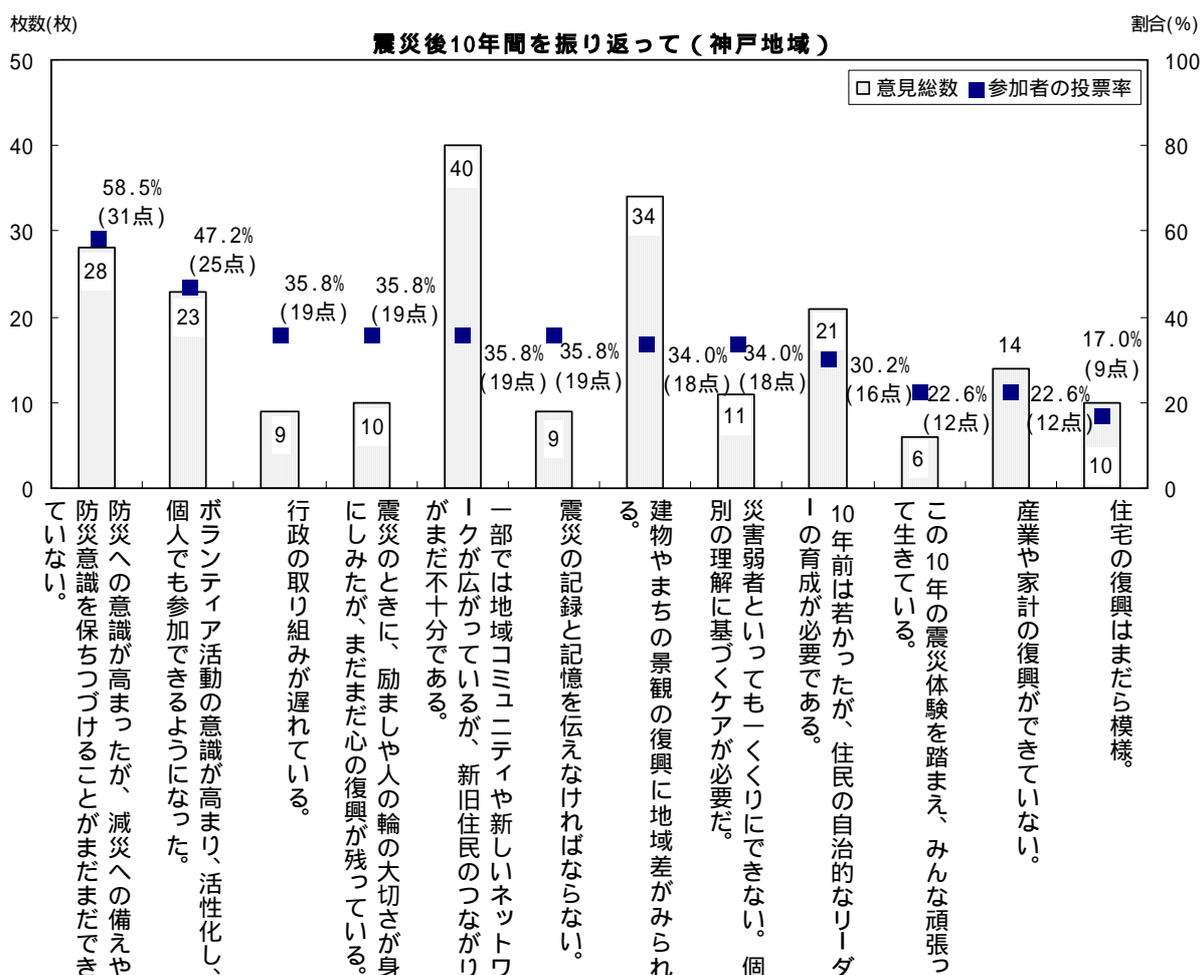
震災の記憶を伝えることが難しい(66)

あの時得た教訓、命の大切さを一人でも多くの人達に伝えることが出来つつある。(66)	体験した人たちの本音の声あまり聞かない(66)
---	-------------------------

産業や暮らしに対する復興が出来ていない(66)

個人的に経済的な復興ができていない(66)	借家・借地人等の権利被害を救済できなかった。(66)
地域内での新しい働き方を生み出すことが出来ていない。(66)	中国と神戸を結びつけるプロジェクトがあまり出来なかった。(66)
被災地で人口回復させる産業の復興があまり出来なかった(66)	
なぜか神戸を離れていけばいいからといって人々への誘いを、借り手の人たちに自主費員として何もしてあげることが出来なかったことに今も心を痛めています。(66)	
私は防災センターを思えることができた(66)	

・「震災後10年を振り返って」について



神戸地域の参加者53名が、会場全体でまとめた「震災後10年を振り返って」は、大きく12項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図を見ると、順位付けのない段階では、「一部では地域コミュニティや新しいネットワークが広がっているが、新旧住民のつながりがまだ不十分である。」や「建物やまちの景観の復興に地域差がみられる。」に含まれる意見が多かったが、順位付けの段階で、「防災への意識が高まったが、減災への備えや防災意識を保ち続けることはまだまだできていない。」を重要だと考えた人が多くなっている。

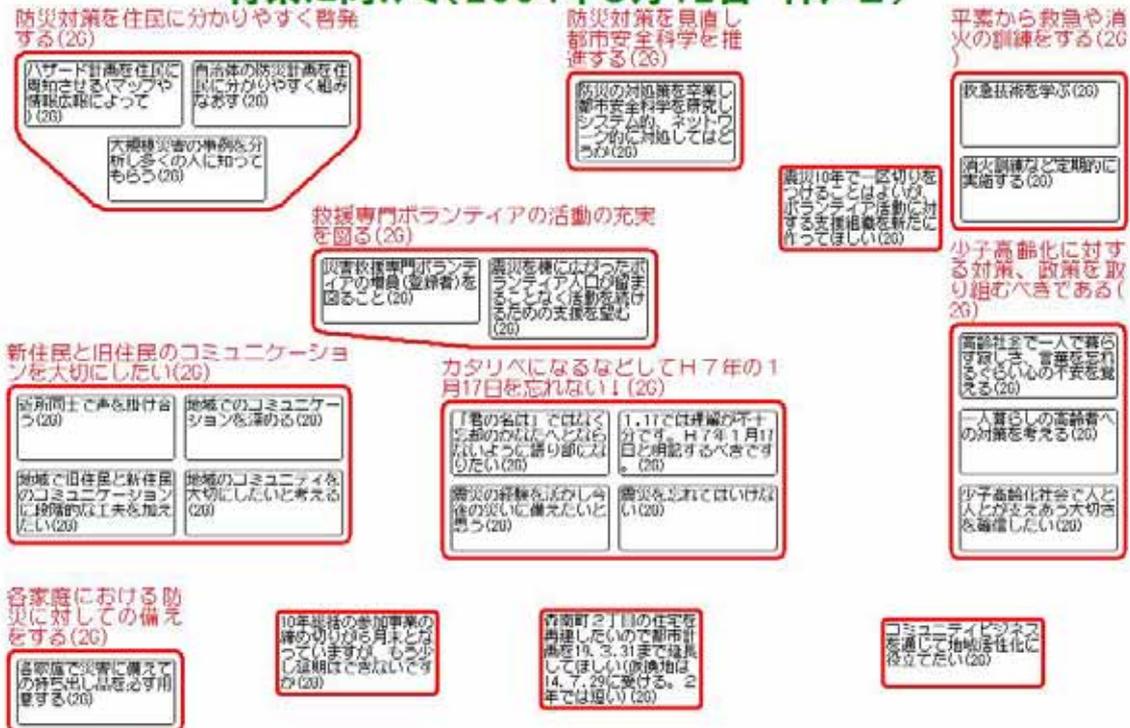
また、「10年前は若かったが、住民の自治的なリーダーの育成が必要である。」という項目の中には、「住民自治組織のレベルアップ」、「住民、自主防災のリーダーが不足している」あるいは「後継者の教養をにらんだ住民自治活動。リーダーの責務。」というようにリーダーの資質や後継者の問題をあげる意見もあった。

・ステップ2：各班のまとめ

将来に向けて(2004年6月12日 神戸1)



将来に向けて(2004年6月12日 神戸2)



将来に向けて(2004年6月12日 神戸3)

健康な体を持った人が元氣になつてこそ眞の復興といえる。(36)

震災で被害者となつた人の支援は必要だと感じます。(36)

物々とはびく行旅にオンラインでソッコするのは駄目、自分の命は自分で守る覚悟が必要(36)

携帯メールとカンパは閉口権を止め、中傷のあるものにしない。(36)

コミュニケーションを深めるためには手話通訳者や有資格者が必要(36)

やはり人とのコミュニケーションを深めて行く(36)

人が集まる場所には手話通訳や筆跡筆記が必要と考えること。(36)

明るい面でも、中・高生の集まる場所には有資格者もいる。(36)

適切な震災情報を発信、伝達する。(36)

次世代へ震災の体験を確実に伝える。(36)

震災の恐ろしさを次世代の人に伝える(36)

大人が子供達に震災の大切さを伝えていく(36)

私達は震災時の恐ろしさを論じていくべきだ(36)

震災情報発信のあり方の検証をする(36)

あくまで市の中心に震災情報の発信基地が必要。(36)

結果より経過をもっと情報発信する。(36)

単年度の震災に抑らざる復興の半さを発信。(36)

防災未来センターをもっと、オープンにすべき。(市庁でさえ知らない人がいる)(36)

避難所のあり方を感覚障害者にも配慮する等もっと具体的に検証する(36)

災害が起きた時聴覚障害者が安心して集まれる所を考える。(36)

避難所を明確に表示する。(36)

車と場所でのトイレがない、前にあった所にはない。(36)

地域、自然、予算、ソフトが、ミスマッチしない都市計画をしていくべき。(36)

自然をいかに活かす街づくりを推進する(36)

地域特性を生かした街づくり、都市計画(36)

陸・海・空の三位一体の土地整備。(36)

六甲山の自然を壊すまでには都市計画(36)

市民の納品のゆく予算づくりをしてほしい(36)

街づくりの予算だけでなくソフトをもどまった予算組み(36)

直し直あつたに予算組み(36)

ソフト、ハードがうまくかみあつた住民主体の街づくりをしよう(36)

災害時に、ハード面とソフト面がすぐに機能するように願う。(36)

住民の住居のための住居によるまちづくり都市計画(36)

将来に向けて(2004年6月12日 神戸4)

防災、減災の市民への意識の向上推進(46)

意識付けのための行政が市民に対して主導して推進(46)

災害は遠い未来のことではなく、明日のこととして理解すべき(46)

復興より、防災、減災を伝える事業の実施(46)

防災、減災を市民に伝えるための方法の確立(46)

防災意識を高める工夫(南海地震を考え)(46)

1. 17の伝承活動の推進(46)

1.17伝承行事の継続、県としての行事とする(46)

10年前を想定して身の回りの防災を整備する(46)

海外、世界に伝承キャンペーンを実施する(46)

震災の記録を残していく(震災時一機在の復興まで)(46)

世界に伝承するための目で見えてわかる被災物の保存と公開をする(46)

シェルターの必要、自然災害(地震)、テロ戦争、原子力などの被災に防災より減災が重要(46)

共助のためのコミュニケーション作りと施設づくり(46)

お互いになんでも話し合える仲間を作りたい(46)

誰もが不安なとき、誰かに話したいとき、話がしたいときや集まれる場所がある(46)

地域に新しく住居を移した人々とのコミュニケーション作りを大切に地域学を学ぶ(46)

地域の中で一人でも多くの友人を作る(46)

安心、安全マニュアル作り(46)

各人のハザードマップの作成の推進(46)

県民への意識付けのためのマニュアルと取り方の案としてわかりやすく推進(46)

倒れない家、倒れない家具のモデル作成(46)

非常時のマニュアル作り(整備)をする(46)

備えに対する具体的マニュアルを完備(46)

有事に備え、「おなえよ、つねに」(46)

種々ある度に対応する(避難、緊急連絡網)(46)

防災意識作り(地域での)(46)

ボランティア活動への積極的参加とマニュアル作りが大切(46)

ボランティアのあり方のマニュアルづくり(46)

ボランティアを通じ地域社会に積極的に参加する(46)

前編的的安全・安心は人の知恵で防ぐべきだ(46)

困っている老人がまだいます、少しでも相談して力になりたい(46)

将来ボランティア活動を継続したい(46)

防災地域ボランティア組織作り(46)

ボランティア活動の見直し時期(46)

各区人口の増え方がバラバラ、保育所がもっと必要(46)

人と防災未来センターのあり方の検討。備えも表示すべき(46)

障害者に対しての生活保護に携わることはボランティアではない(手話通訳、ガイドヘルパー、点字地)(46)

将来に向けて(2004年6月12日 神戸5)

行政への提案。復興住宅へ、若い人にも入ってほしい(5G)

復興住宅に50㎡から60㎡の若い住居を増やしていく。(リノベーター) (5G)	復興文化を創出し、発信する(5G)
	福祉センターの活用(5G)

個人の防災対策の向上。行政が定めるこの限界をPRすることが必要(5G)

個人の防災対策として、耐震診断をすること(5G)	市庁の自主防災会議の向上には行政が働きかけること、限界をPRすることが必要(5G)
	地震に対する備えを各自がしておくことが必要(5G)

次の災害が何かを考え、市民も含め行政が防災上取り組むべきである(5G)

行政の中で被災下で本当はどのような状況であったのかを明らかにする必要があり(5G)	次の災害は何か考えよう(同じ災害がまた来るとは限らない)(5G)
地域、行政としての防災対策(防災道路等、耐震建築)の推進(5G)	防災に関し行政は雇用するに足りるか(5G)

情報の共有、地域の密なつながりの広場の必要(5G)

エコの推進の行為がセーブされていないこと(5G)

地域住民のつながりとの確立と、コミュニティとしての防災組織の確立(5G)

コミュニティとしての防災組織の確立(5G)	自己責任を承知して、コミュニティに参加を(5G)
自治会やコミュニティは仲良しクラブではなく、異なる意見の折り合いをつける場との認識が必要(5G)	地域の住民の団結(5G)
頼れるのは遠い戦場でなく、近所の心である(5G)	地域組織、ボランティアの人数の増強作り(5G)
	地域の人々のつながりの必要性を伝える(5G)

復興住宅へのサポート体制が必要(5G)

住宅内の助け合いネットワークの育成。異世代コミュニティ(5G)	復興住宅のあり方(5G)
復興住宅への移住の共有。サポートを住民と共に考え、実施していく(5G)	復興住宅間のはしわたしのレポート(5G)

災害時の情報、医療を共有するセンターが必要(5G)

震災直前に災害時の医療センターがあるとよい(5G)	災害時の情報センターとどこに開けばいいの(5G)
---------------------------	--------------------------

将来に向けて(2004年6月12日 神戸6)

親子の関係 10年がたつが外側は良くなったが内側は広がっている(6G)

親子の関係 10年がたつが外側は良くなったが内側は広がっている(6G)	教育(感じた事)子供の教育にもう少少親の大人が気をつける(6G)
-------------------------------------	----------------------------------

震災を経験した者でしか分からない気持ちを語り続けることが大切である(6G)

建物、環境が壊れていても心のケアがまた手遅れである。ことを新聞、マスコミを揮って伝えていく(6G)	自分の感じた事を自分の力でも伝えていきたい。(6G)
心をつないで行く為にも昔からのことを語りつけて、人の心の支えになってほしい(6G)	震災で失ったものの大切さを思いその体験を通して命の大切さと人との大切さを後世に語りつづける(6G)
	大震災を体験した神戸だからこゝで忘れられる生の声をつぶさないようにしたい。(6G)

大震災に対してよりも自分の周りの事にもっと気をつけない(6G)

「人と防災未来センター」を多くの人のに見てもらい防災意識を高める(6G)

ボランティアが活動しやすい環境を作ることが大切だ(6G)

ボランティアの人たちが円滑に動けるように、システムをつくり責任を育てる(6G)	体どりがなければ助け合いも難しいので、地域活動に皆が参加出来るようにゆとりある時間をつくりをする。仕事量がなく、しかしゆとりに。(6G)
行政への提案、助成金の申請をもっと簡便にしたい。地域で正高た強い方を育てるために。(6G)	

日頃の地震に対する備えが大切だ(6G)

緊急対応について学んだように思いますが。(6G)	大震災への備えも心のしなやかさが欠かれないという思いの気づき(6G)
日頃から地震に対する備えをする。(6G)	防災を推進した街づくりをするように、行政と企業と住民が話し合う場をつくらせていく(6G)

課題解決には身近な発想転換が必要だ。(日常が非常を支える)(6G)

安全は目的ではなく共生から生まれる結果です(6G)	災害に備える事と普段の暮らしを豊かにすることは中身は同じ(6G)
---------------------------	----------------------------------

閉じこもりの人達に声をかけるなどして地域の人たちとのふれあいを深め、コミュニケーションをする(6G)

一人くらしの高齢者と楽しい時間を保つために会食、手芸などでふれあいたい(6G)	即住民と被災後その地域に住むようにならねば方との交流、地域活動への参加を呼びかけ(6G)	人とのつながり、近所どのコミュニケーションのあり方を見直し(6G)
地域高齢者とのふれあいの場を作る。(機材をわけて楽しむ歌を歌うようなこと。)(6G)	目に見えない声を把握するためにコミュニケーションの場をつくる。(6G)	災害時におけるコミュニティの重要性を知ってもらう。(6G)

・ステップ2：神戸地域のまとめ

将来に向けて(2024年6月12日 神戸)

様々な地域活動(ボランティア・NPO・自治会・OB)がしやすくなる環境を整えていくことが大切だ(22点)

1・17の体験を通して、今後生命の大切さを継承し、築いていくことが大切だ(24点)

1・17の体験活動の推進(40)

1・17の体験活動の推進(40)

ボランティア活動への積極的参加(40)

ボランティア活動の推進(40)

高齢者や障害者の多い住宅への様々な支援の取り組みが必要だ(22点)

高齢者や障害者の多い住宅への様々な支援の取り組みが必要だ(22点)

早く安全・安心で豊かなまちにしたい(18点)

早く安全・安心で豊かなまちにしたい(18点)

24時間365日安心できるまちづくり(20)

24時間365日安心できるまちづくり(20)

住居の早期対策(10)

住居の早期対策(10)

災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていく。日常が非常を支える。(29点)

災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていく。日常が非常を支える。(29点)

災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていく。日常が非常を支える。(29点)

災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていく。日常が非常を支える。(29点)

災害時に弱者には特別な対応が重要だ(25点)

災害時に弱者には特別な対応が重要だ(25点)

災害時に弱者には特別な対応が重要だ(25点)

災害時に弱者には特別な対応が重要だ(25点)

地域の中の新旧・世代を超えたつながりやきずなを作っていく(22点)

地域の中の新旧・世代を超えたつながりやきずなを作っていく(22点)

地域の中の新旧・世代を超えたつながりやきずなを作っていく(22点)

地域の中の新旧・世代を超えたつながりやきずなを作っていく(22点)

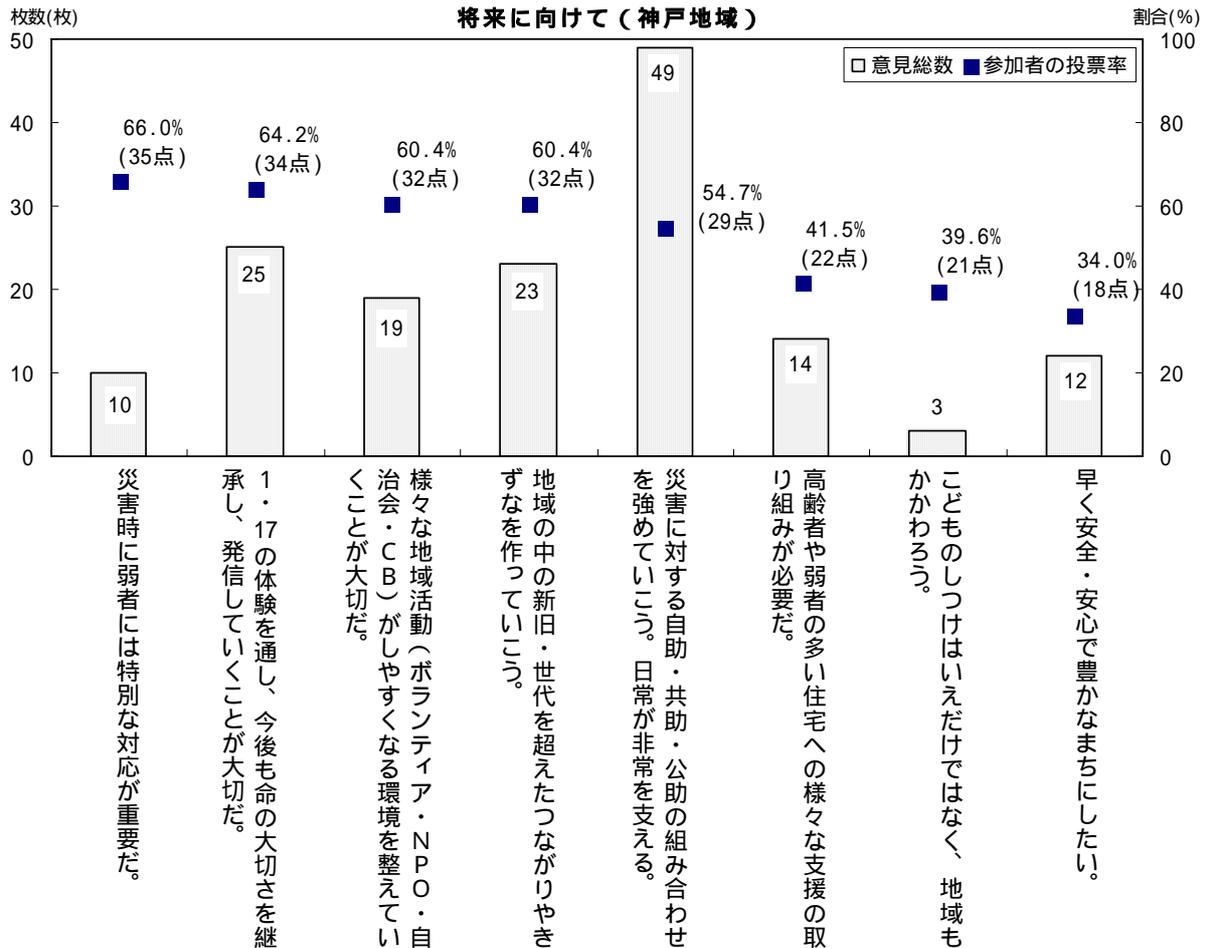
こものしつけは家だけでなく、地域もわらわ(21点)

こものしつけは家だけでなく、地域もわらわ(21点)

こものしつけは家だけでなく、地域もわらわ(21点)

こものしつけは家だけでなく、地域もわらわ(21点)

・「将来に向けて」について



会場全体でまとめた「将来に向けて」については、大きく8項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「災害時に弱者には特別な対応が重要だ。」「1・17の体験を通し、今後も命の大切さを継承し、発信していくことが大切だ。」「様々な地域活動（ボランティア・NPO・自治会・CB）がしやすくなる環境を整えていくことが大切だ。」などを重要と考えた人の方が多くなっている。

また、「こどものしつけは家だけでなく、地域もかかわろう。」という項目の中には、「家庭教育・しつけ」「子供に対する親の教育をもっと考えるべきだと思う」「子供の教育にもう少し廻りの大人が気をつける」といった教育問題を通して地域のまちづくりを考えていこうという意見もあった。